九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

エンジョイベースボール : 野球でつなぐ、こころのコミュニティ : 伊原・増田・平田・熊丸・鎌田論文へのコメント

服巻, 豊
鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

https://doi.org/10.15017/1448770

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 1, pp.56-61, 2010-03-01. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学総合臨床心理センター紀要，2009，第1号，57－61頁
Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu U., 2009, Vol.1, pp57－61

エンジョイベースボール

―野球でつなぐ、こころのコミュニティ―
伊原・増田・平田・熊丸・鎌田論文へのコメント

服　巻　　豊*

本論を読み進めていくなかで、ココロンズという野球チームの野球を通した臨床心理学的地域援助について考えながらも、野球場での野球そのものの臨場感、スポーツの一体感、スポーツを通しての子どもの成長などが垣間見え、わくわくして何度も読みかえした。私自身、ココロンズの活動にわずかながらも関与したこともあるOBとして、かつコミュニティ心理学を看板に掲げているものとして思うままにコメントをさせていただきたい。

（1）ココロンズという機能的コミュニティ

伊原氏らは、「ココロンズは、臨床心理学を学び、（九州大学大学院総合臨床心理センター内、心理教育）相談室に所属する大学院生やOB（OG含む）が中心になって構成された野球チームである」としている。したがってココロンズというチームは、大学院で同じ釜の飯を食べ、ともに学問を学んできた先輩後輩を含めた縦のつながりを持つ仲間であり、野球というスポーツをこの仲間でやりたいあるいはやってみたいと思う仲間、つまり野球を楽しもうという共通の目標・目的を持った機能的コミュニティということもできる。

本論では触れられていないが、この機能的コミュニティは、課題（野球であれば試合ができ、試合を楽しみ、試合に勝つこと）達成への努力を重ねていくうちに、相互理解が高まり、集団凝集性を高め、仲間集団の相互サポート、目標達成への活動エネルギーへと変換されていく大きな流れにつながっていく。

この大きな流れの先にあるココロンズの付加的目標は、「エンジョイベースボール」のスローガンのもとココロンズメンバーがいかに野球というスポーツの楽しみを実感し、楽しむためにはなにが必要なのかをそれぞれが感じていけることなのかもしれない。

ここで見逃せないのが、ココロンズメンバー全員が臨床心理士あるいは臨床心理士を目指す院生という野球チームとしてはあり得ない特徴がここにある。このことは、ココロンズメンバーが、野球を楽しむその先に、野球を通じてしかみることのできない対戦相手の子どもたちの様子や子どもたちの本来の力やたくましさをじかに感じながら、自分たちの実力の範囲内において懸命になりつつ「子どもたちのよりよい体験」を提供することを可能としているように思われる。

* 鹿児島大学大学院臨床心理学研究科

さらに、ココロンズの児童養護施設の子どもたちや中学校野球部との対戦をする活動は、私の知る限りでは９年以上継続されており、メンバーが集まってくる経過も、もともと野球が好き、あるいは野球をやってみたいという野球を中心にして集まったメンバーだけでなく、野球を通して子どもたちや他職種とのかかわりを持ちたいという志向を持ったメンバーも集まっているのではないだろうか。

つまり、こうしたチームメンバーの特徴が、機能的コミュニティの能力を高め、伊原氏らがいう「臨床心理学的地域援助として野球でかかわる」ことの実現に大きく寄与しているように思われる。

（2）発達促進的な臨床心理学的地域援助を可能とする窓口メンバーの機能

本論は、２つの試合について試合までの経過、試合、試合後について事例的に紹介されている。まず、事例１の対戦相手は、児童養護施設の子どもたちである。児童養護施設は、どこの施設でも子どもの健全育成のために、地域周辺の児童養護施設同士での野球を通した交流が盛んにおこなわれている。施設によって違いはあるが、チーム作りから大変さがあり、チームメンバーは男の子中心であるが、女の子たちも応援することでチームに貢献する工夫をしている施設もあるようである。このように児童養護施設では、子どもたちの心身の健全育成のためにも野球チームを作り、他施設との対戦・交流をすることは、スポーツの楽しさを実感し、仲間との協調・結束力、社会性を学ぶ重要な機会であるようである。また、ココロンズの窓口メンバー（鎌田氏）によれば、事例１のＡ園の野球部では、縦の力関係が強調され、実力がついてきて、それに伴い失敗をする低学年や他のチームへのネガティブな発言が目立ち、「勝負のみを重視し他者への関わりも殺伐としている」状況であった。そうした背景にあって、窓口メンバーは、「純粋にスポーツを楽しんでもらいたい、大人との交流を通してコミュニケーションのあり方を体験して欲しい」と考えたようである。

事例２の対戦相手は、不登校や中途退学を経験した生徒が多数いる通信制のＢ高校の野球同好会の生徒たちである。その子どもたち10数名が、野球同好会という気風とエネルギーを湧きあがらせ、子どもたち自身で顧問候補を見つけ、説得し、そのエネルギーの種を受け取った女性教員が顧問となった。野球同好会の活動ははじまり、大会に出場するも、エラーなどのミスの連続で大敗した。大会出場がきっかけで同好会の生徒たちは、グラウンドもなく、対外試合ができるまで実力は伴っていないなかで、やる気に燃え、練習をはじめたようである。試合形式の経験は、とても重要であり、ある程度力がつくと練習で身につけたことを試合で実践してみることが練習の成果をみることにも、さらなる練習の意欲につながることになる。生徒たちは、大会での大敗をもとに練習を重ね、ある程度自信がついてきたところで自発的に試合を望む声をあげてきたようである。こうした背景の中で学生スタッフとしてＢ高校に関わっている窓口メンバー（伊原氏）が登場する。すでにことここに至っては、野球同好会にとって試合をする機が熟していたことが予測され、それを察した窓口メンバーの方から顧問を通して試合のオファーを出したようである。

事例１、２のいずれの窓口メンバーは、子どもたちの生活の場（事例１であれば施設生活、事例

2であれば高校生活）をともにすごし、彼ら（野球チーム）の行動や流れから彼らの潜在的ニーズを推測し、汲み取り、ココロンズという機能的コミュニティを活用して野球チームというコミュニティにアプローチ（試合を提案）し、試合を通してかかわり、ニーズにこたえるという実践を行っている。

田嶌（2002）は、心理士の役割として、学校やコミュニティを支援する際、目標の設定と共有が大切でそのためのアセスメントをし、現場に出向いて現場の潜在的ニーズを汲み取り、引き出す工夫が必要になり、いかなる場合も結局は本人たちが「元気になること」、あるいは「今より元気をなくさないこと」を大目標にすることを強調している。このことは、窓口メンバーが、それぞれの現場に出向き、事例1であれば子どもたち個人個人を見つめながらせっかくスポーツの肯定的体験ができる機会なのにうまくできないチーム状況があり、そこには個別の子どもたちの問題の背景も影響している。事例2では野球同好会が大会で大敗してもやる気に燃えて練習を積み、試合をしたいと望んでいるチーム状況があり、野球同好会として伸びるチャンスでもあった。そういう状況で窓口メンバーは、事前に施設職員や顧問教師と調整し、子ども・生徒たちのチーム状況をココロンズメンバーに伝え、野球の試合当日にはココロンズにいる野球経験者による指導のチャンスを提供していた。また、試合中にもココロンズメンバーは、窓口メンバーの意図を汲んで試合をするという機能的コミュニティに目的意識をさらに付加していたことにより、ココロンズそのものがひとつの支援機能を有することになったと思われる。

さらに、窓口メンバーの発達促進的な働きとしては、試合後にも、施設職員や顧問教師とのシェアリングを行い、日頃見えなかった子ども・生徒の様子を知り、生活支援に活かそうとする姿勢を持っていることである。このことは、子ども・生徒だけでなく、施設職員や顧問教師をひとりにしない抱え環境を作り出しているようにも思われる。

窓口メンバーの機能は、もともと子どもたち・生徒たちにある自分自身をよくする主体的な自助努力活動を賦活し、試合後にも子どもたちだけでなく、施設職員や顧問教師のたちにも野球チームの成長に関心を寄せる継続的な支援機能を持つことになったのではないだろうか。

実際、試合後に窓口メンバーと子ども・生徒たちや施設職員・顧問教師は試合の話題をし、子ども・生徒たちも休み時間に練習をしたり（事例1）、外野からも声が出たり（事例2）と野球への取り組み方が変わるなどの主体的・自発的発達・成長する力を引き出され、持続し、よりよい生活につながったように思われる。

（3）「弱さ」もひとつの重要な要素

もうひとついわせていただくと、今回の2事例の子ども・生徒への発達促進的要素は、ココロンズのある程度の弱さにあると思われる。伊原氏らは、いかにも野球を通して援助しているように表現しているが、事例1では2対8、事例2では0対18と完敗である。野球において「弱さ」を具現化するのは、ある程度は野球ができる状況にないと試合は成立しないし、試合が成立しなけれ

ば子どもたちが練習で培ったものを試せるだけの場にもならないし、自信をつけてもらうことはできないのである。こうした試合は成立してかつ「弱さ」を持つココロンズは、メンバーみなが「弱さ」をものともせず、野球を楽しみ、失敗しても互いをサポートして励まし、相手チームにも励ましの声をかけるというこころの余裕をみせることが自然とできている。ココロンズメンバーは、野球を通して子どもたちとかかわれることをこころから喜び、楽しんでいるのかも知れない。

伊原氏らも事例2のところで「ココロンズの野球を楽しむという姿に触れたことがよかった」と書いているように、事例1、2のナインたちは、ココロンズメンバーとの野球の試合を通じて、「弱い」チームでもこころの余裕を持ち、楽しみ、相手を思いやることができるのだというモデルを示してもらったのではないだろうか。この出会いは、これまで彼らの出会った同年配の彼らより強い野球チームにはなかった姿であったと思われる。そして彼らの中に、自分たちでもできることがあるのではないかという気持ちが湧き、失敗した仲間を励ましたり、「勝ち負けよりも楽しもうよ」という気風が芽生えることになったのかも知れない。

(4)「楽しむ」姿勢が臨床心理学的地域援助を可能とする

実際、それぞれのココロンズメンバーは、野球を楽しみ、対戦相手とのかかわりを楽しんでいるようである。窓口メンバーもココロンズメンバーとしてこれまで練習や試合をする中で、野球をする楽しさやココロンズのメンバーと野球を楽しむことの積み重ねがあって、はじめて子ども・生徒との対戦に結び付けられるものと思われる。

この「楽しむ」という要素が、ココロンズの活動がここまで続き、臨床心理学的地域援助の要素を含み、伊原氏らを通して論文という形になるまでに成長したのだろうとつくづく感じ入るものである。最後に、ココロンズの「楽しむ」姿勢に共感しつつ、今後の「楽しむ」活動の継続を期待して筆をおきたい。

付　記

9年前、心理教育相談室で吉岡キャプテンや入江コーチらと頭を悩ませながら野球を通してCommunity、Collaboration、Communicationを行い、そこには愛（Love）を込めようとこじつけながらCo-co-lo(ve)-n's（ココロンズ）とみんなで命名したことを思い出す。練習は、毎週火曜日9時くらいから10時の相談室電話当番までの時間で、野球好きとまったく野球を知らない人も集まった。ヒールの靴を履き、スカートで練習に来てくれる仲間もいた。練習を継続すると女性メンバーもキャッチボールもバッティングも上達し、試合ができるまでに成長し、入江コーチの紹介で初試合をしたように記憶している。

その後は、上手窓口メンバーが非常勤先の児童養護施設野球チームとの試合を持ってきて、定期戦になった。定期戦のいいところは、子どもたちの成長が目に見えることである。初めはユニフォー

ムもそろっていない子どもたちは、エラーする仲間を責め、エラーしたらグローブを投げつけていた。もちろんココロンズが試合に勝っていた。定期戦が続く中で子どもたちのチーム力があがり、ココロンズも勝てなくなってしまい、子どもたち同士も責めるより「ドンマイ」とお互いをフォローしている姿に感動したものである。試合後は、恒例のバーベキューで監督として偉そうに“お前たちはすばらしく成長した”と負けチームの監督兼選手としてのたまうたことを今でも赤面の思いで思い出す。

また、同じ思いを持つ仲間と野球をしたいと強く思わせていただき、このような機会をいただいたことに感謝申し上げます。

引用文献

田嶌誠一（2002）：「現場のニーズを汲み取る、引き出す、応える」、臨床心理学、2（1）、24-28.